

高知工科大学 学生会員 前田 遼佑
高知工科大学 フェロー会員 草柳 俊二

1. 序論

平成 19 年における高知県外から県内への観光客入込数は 3,05 万人であり、対前年比 94.6%の減少である。全国的な入込状況から見ても高知県は下位に位置している。高知県の有力な観光資源として、天狗高原、アンパンマンミュージアム、龍河洞などが挙げられるが、これらは県内各場所に点在しており、それらを繋ぐ交通手段は少ない。またそれぞれが独立しており、共通なコンセプトが明確ではない。本研究では、高知県の観光資源を見直すと同時に、高知県の観光の基軸となるプロジェクトを立ち上げる必要があると考えた。

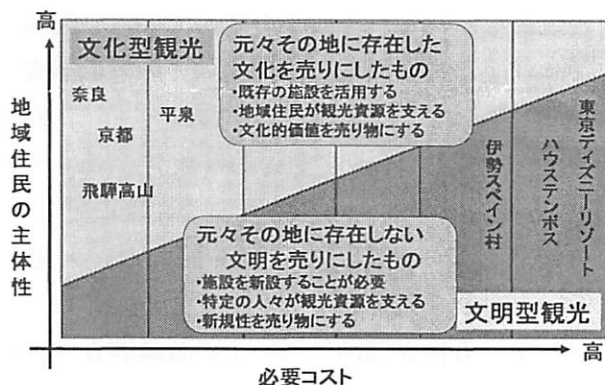


図-1. 文明型観光と文化型観光

図-1に示すとおり、我が国の観光プロジェクトは大きく分けて、二つのパターンに分けることができる。2000年代に入り、多くのテーマパークが経営危機に陥り閉鎖に追い込まれた。そのほとんどが「文明型」の観光プロジェクトである。本研究では、高知県の中心地である高知市内の観光力を向上させることを目的とし、自然の良港である浦戸湾の観光資源化を行い、外来文明ではなく地元文化を見せ、県民力によるコストのかからない「文化型」観光プロジェクトを立ち上げることに付き検討した。

2. 浦戸湾の現状調査

浦戸湾沿岸を対象とし、オートバイによる現地調査を行った。現状の陸路による交通手段では浦戸湾沿岸を一周するのに二時間以上を要する。これでは観光客は移動時間に多くの時間を費やし、観光スポット周遊の時間が確保できない。そこで、本研究では、湾内を縦横に走る「水上タクシーの運行システム」を提案した。また、観光資源としては、新山本造船所の建物や弘化台の卸売市場、ワンパーク高知付近の広場等がリストアップされ、これらを観光スポットとして再開発することにつき検討することとした。

3. 「維新の港」再開発計画の概要

(1). 観光施設計画

リストアップされた観光スポットの個々の開発計画を下記①～⑥のとおり設定し、プロジェクト名を「維新の港」と命名した。全体概要を図-2に示す。

- ①高知中央卸売市場の観光資源化：現在、高知近海で採れた新鮮な魚介類を販売しているが、土産としての販売にとどまっている。集客のため、高知の伝統料理を堪能できるような施設を整備する。
- ②土佐の町「観光ワーフ」再現計画：稼動していないふ頭用地にワーフを設置する。「明治時代の土佐の町」をコンセプトに、統一した街並みを再現し生活感のある建物を建設する。
- ③海のレストラン：浦戸湾内のツヅキ島と衣カ島へレストランを設置する。衣カ島は橋にてアクセス可能だが、ツヅキ島へは船が必要となる。なお両島は自然保護地域であり、建物を建てる際は配慮を伴う。
- ④維新の帆船：明治時代、土佐藩はいろは丸・咸臨丸・夕顔丸といった多くの帆船を所持しており、当時の面影を再現する。例えば、長崎県にあるハウステンボスにはいろは丸と同型の観光丸が停泊している。
- ⑤帆船博物館の建設：浦戸湾内に造船所跡地があり、施設も現存している。ここをかつて土佐藩が所有していた帆船の模型展示会場とし、また、高知の歴史を知ることのできる博物館として再建設する。展示する模

— 336 —